

山間寺院の特質

江谷 寛

1. 平安時代の山間寺院

山間寺院については「日本霊異記」をとり上げられることが多い。その中には8世紀ごろに、山間で仏道修行して呪術・医術を体得した「禪師」とよばれる僧侶たちがいたことがみえる。これは宝亀元年（770）の道鏡による山林仏教の禁制に対するものとして、保良宮において孝謙上皇の病氣看護のため、治療の術をもった10人の僧侶を「十禪師」としたことによるものであった。こうした禪師の中には吉野の金峰山をはじめ、畿内の靈山で修行していた話も伝えられている。このような平安時代以前に発展していた十禪師の山林修行などに大きな影響を与えたのは、最澄・空海・円仁・円珍たちの僧侶が中国から帰国する時に持ち帰った天台・真言の山岳仏教（密教）であった。延暦寺や金剛峰寺が建立されたのは、俗世間をさけて修行三昧を願ったものであった。「霊異記」にみられるような形の山林修行は本来は邪道とされていたが、弘仁7年（816）には空海に、弘仁13年（822）には最澄の死後ではあったが比叡山に戒壇院の建立が認められるようになったことと、本地垂迹説による神仏習合が広まり、次第に全国的に天台・真言系の山間寺院が建立されるようになった。こうした山間寺院は平安仏教の特質であると同時に、古代仏教寺院の本来の在り方でもあった。

2. 如意寺の発掘調査

平安遷都の当初には平安京内には東寺と西寺の二寺しか建立されておらず、藤原氏をはじめ、多くの氏族は平安京外に寺院を建立していた。こうした京外の寺院の一つである如意寺は、滋賀県大津市の園城寺（三井寺）の絵図（図1）に描かれている堂塔の姿と全く同じ遺構が平安京の東方の山中に残っており、発掘調査の結果からも文献からもよく一致していることが明らかになってきた。

如意寺は「阿姿縛抄」によると、平親信によって建立されたと記しているから、10世紀中頃と考えられ、中心伽藍の他に深禅院、西方院、正方院、宝殿院、大慈院などの6つの寺院群からなる大規模な山間寺院である。発掘調査の結果、10世紀前半の灰釉陶器をはじめ、緑釉陶器、土師器、輸入陶磁器などが多量に出土した。

6つの寺院群の建立されている地形は、南側に開かれた逆凹字形の場所を選び西・北・東の三方を削平して平坦面を作って堂塔を建てている。こうした如意寺の調査から畿内周辺における、平安時代の山間寺院の在り方がかなり明らかになってきた。

3. 山間寺院の特質

1 研究者によってはそれぞれ理由があって、山岳寺院、山林寺院、山間寺院などの表現があって統一していない。

2 平安時代の山間寺院では、講堂が伽藍の中心になる傾向があり、講堂を本堂と呼ぶことがある（図2）。

3 平安時代には、山間寺院だけでなく、平地寺院でも本堂の前面に常行堂と法華堂が配置されるようになる（図3）。

4 山間寺院では毘沙門信仰の上にのった形で観音信仰が広まり、十一面観音を本尊とし、脇侍に不動明王と毘沙門天（多聞天）を置くという三点セットができてくる。如意寺の本尊は十一面観音であり、和泉・法道寺はこの三点セットである。

5 園田香融氏がいわれるように、南都大安寺と山中の比蘇寺との関係に見られるような、平地寺院と山間寺院が相互に関連をもっていたという例も多い。例えば法隆寺と松尾寺、興福寺と室生寺、三井寺と如意寺、平等院と禪定寺、醍醐寺と金胎寺という関係があるが、なお寺院間だけでなく、法道寺のように、和泉国の一宮である大鳥大社の奥の院という関係もある。

6 山間寺院を造営した檀越は文献で明らかな場合もあるが造営にかかわった工人についての研究は殆ど知られていない。ただ、「吾妻鏡」文治5年7月19日、8月7日の記事には、頼朝の奥州出兵の軍勢の最前列に置かれた、鋤・鍬を持ち、土石を運ぶという兵士とか僧兵が居り、こうした点を考えることもできる。

7 中国の場合には、天台山・五台山などとの関係があるが、道教関係の山間寺院もあり、韓国の山間寺院の中には儒教に迫害されて山中に逃れた場合もある。

8 その他、山間寺院と磨崖仏との関係、白山信仰との関係、修験道との関係なども考えなければならぬが、考古学や文献だけでなく、仏教史、建築史、仏教美術とも併せて研究しなければならない。

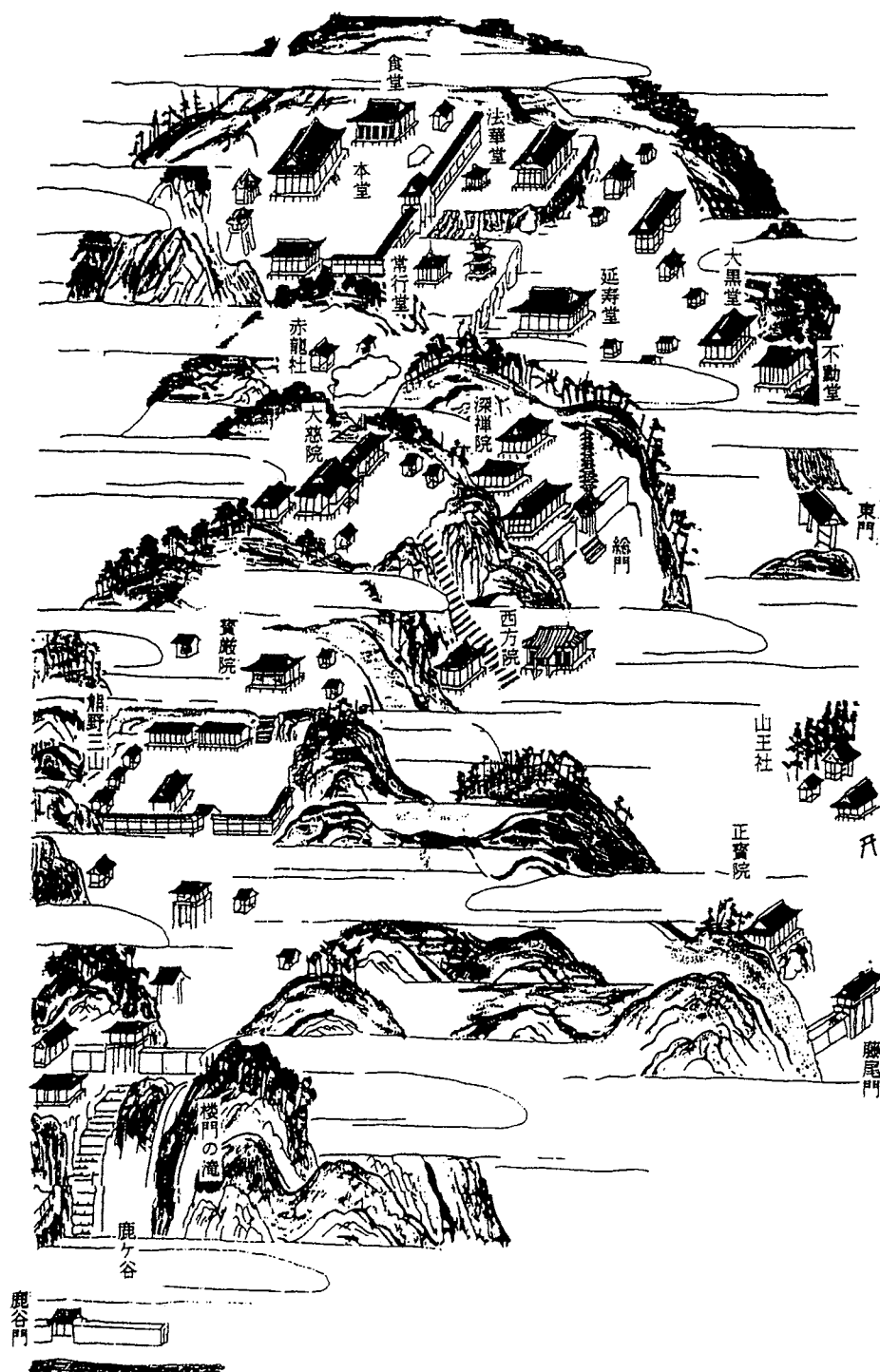


図1 園城寺境内古図

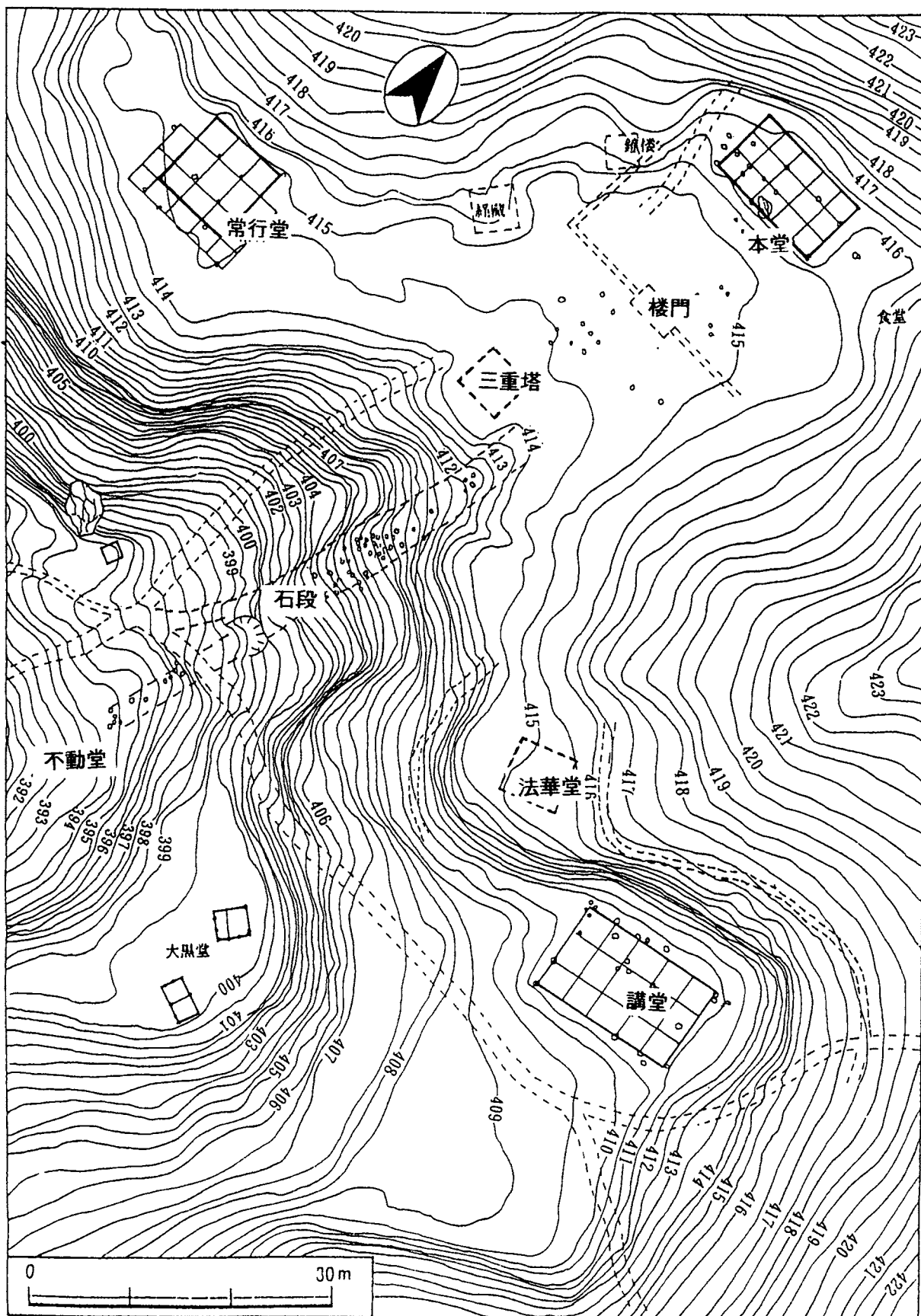


図2 如意寺本堂地区の伽藍

